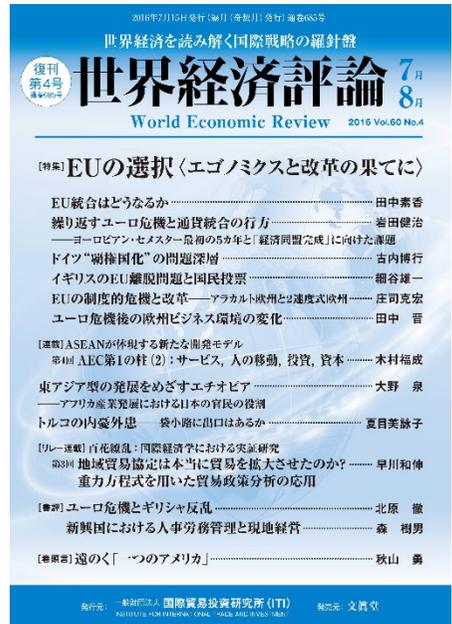


本論文は

# 世界経済評論 2016年7/8月号

(2016年7月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

# 6,600円

税込

17%

送料無料  
OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

## デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

私の愛読書の中の1冊、ルイジ・バルジーニ著『ヨーロッパ人』（イギリス版タイトル“*The Impossible Europeans*” 1983、日本語版、みすず書房、1986年）を久しぶりに読み返した。約30年前に本書を初めて読んだ。「イギリス人」「ドイツ人」「フランス人」「イタリア人」「オランダ人」「アメリカ人」の気質や生活様式、価値観などを豊富なエピソードをまじえながらユーモアたっぷりに語っている。何度読み返してみても、そのたび、新しい発見があり、興味の尽きない名著である。

著者バルジーニは、1908年ミラノに生まれ、本書の出版翌年の1984年に没したイタリア人ジャーナリストである。1958年から14年間、下院議員として政治家生活を送っている。彼の名を一躍世界中に広めたのは、1964年に出版された“*The Italians*”（日本語版『イタリア人』弘文堂、1965年）であり、世界のベストセラーとなった。祖国イタリアの恥部や同胞の欠点をさらけ出したと厳しく批判されたものの、バルジーニはいささかも持論を曲げることはなかった。

タイトルの“*Impossible*”とは、翻訳者の浅井泰範氏が解説されているように、ごくありきたりの「不可能な」という意味でなくて、同じヨーロッパ人として、「どうにも手に負えない」とか、「いかんともしがたい」という痛烈な警句の意味に使われているという。結局、「理解しがたい」という日本語に落ち着いたようだが、「一にして多のヨーロッパ人」の国民性の特徴を上手く捉えている。

かつて、大陸ヨーロッパ人が敬愛と羨望の故にイギリス人を真似たという。著者は「イギリス人は動じない」と述べている。イギリス人は「沈着冷静さ」であり、「迫りくる危機には

冷静さを保ち、当面はなにもしないで、暗い状況が晴れるまでじっと待つことが、一番良いことだ」と考えた。ただ、イギリス人のこの特性（バルジーニは一番の徳性とみている）も、時代に合わなくなって自国に害をもたらしたとして、ヨーロッパ統合へのバスに乗り損ねた理由の一つに挙げている。「イギリス人は、バスにはいつでも乗れると思っていたのだ」と。まさにそのとおりである。

また、「イギリス人は、いまでも大ブリテン島が、大陸ヨーロッパと切り離されているのは神の意志によるものと信じており、条約とか、トンネルとかをつくって、大陸にくっつけることは、神を冒瀆する行為ではないか」と考えているという。「イギリス人はいつの時代にあっても、行動の自由を擁護し、よその国の判断を信頼するより、イギリス人自身の判断のミス犠牲者になった方がよい」という。なるほど、ブリュッセルの超国家的な官僚機構を毛嫌いするのもイギリス人のDNAのせいだ。イギリス人は伝統的に「光栄ある孤立」を誇りとしていた。

バルジーニは「ヨーロッパの国々は時々、いらだった牝鶏のように内輪どうしでつつきあい、アメリカといさかいを起こす」と30年前に嘆いていた。昨今のように、難民危機、ギリシャ危機、ロシア制裁などの対応を巡って、ヨーロッパ人が内部分裂騒ぎを起こしているが、ヨーロッパ統合への思いを熱く語っていたバルジーニはきっとあの世で悲しんでいることだろう。

今回は、ドイツ人など他の *impossible Europeans* のことを書いてみたい。

たなかともよし 駿河台大学名誉教授。

## “Impossible Europeans” 雑感